

六の菴和の巻

印



鈴屋門人
市崗孟立序撰

草菴和奇集類題目錄一

春部

立春	早春	海邊早春
早春霞	早春水	初春
初春鶯	霞	曙霞
夕霞	山霞	遠山霞
檜原霞	海霞	海邊霞
浦霞	湖霞	河邊霞
鶯	雪中鶯	曉鶯
曙鶯	朝鶯	夕鶯
谷鶯	鶯出谷	故柳馬

野鴛
若菜
澤若菜
山殘雪
二月餘寒
梅薰風
梅香薰袖
夜梅
里梅
古宅梅
雨中榭

鶯為友
雪中若菜
春雪
野殘雪
梅
梅薰枕
雪中梅
月前梅
庭梅
柳
榭露

子日祝
野若菜
殘雪
餘寒
梅風
梅薰袖
朝梅
行路梅
闲庭梅
榭風
春月

春曉月
山春月
故鄉春月
夕春雨
故鄉春雨
霞中歸馬
夜歸馬
湖歸馬
曲水宴
原雲雀
花

春夕月
河上春月
春雨
夜春雨
旅春雨
曉歸馬
溪夜歸馬
水鄉歸馬
雉
鸞
待花

春月幽
水鄉春月
春夕雨
何春雨
歸雁
夕歸馬
海邊歸馬
三月三日
雲雀
梨花
待花

雨 中 待 花	雨 後 花	月 照 花	夕 花	折 花	花 留 客	見 花	花 未 遍	尋 花	雨 中 待 花
閑 居 待 花	霞 中 花	月 前 花	夜 花	曉 花	花 薰 袖	見 花 日 暮	花 盛	遠 尋 花	閑 居 待 花
初 花	旅 宿 花	雨 中 花	夜 思 花	朝 花	花 捧 頭	花 下 送 日	山 花 盛	散 花	初 花
山 路 花	山 花	山 家 花	山 花	山 家 花	山 家 花	山 家 花	山 家 花	山 家 花	山 家 花

中竟同二三

谷 花	關 花	他 邊 花	湖 邊 花	濱 花	古 寺 花	松 隴 花	花 忘 老	花 友	花 間 鶯	花 發 風 雨 多
古 後 花	里 花	何 邊 花	海 邊 花	禁 中 花	名 不 花	花 交 松	寄 花 述 懷	花 鏡	風 前 花	花 隨 風
杜 花	原 花	楊 邊 花	浦 花	故 御 花	庭 前 花	花 如 雪	寄 花 懷 舊	花 下 鐘	惜 花	落 花

十六

十五

水鄉落花	河落花	池落花
關落花	行路落花	夕落花
惜落花 十六	遲櫻	躑躅
山躑躅	歎冬 十九	何歎冬
藤	水過藤	池藤
松上藤	暮春藤	春曉 二十
春天象	春地儀	春欲暮
暮春	暮春兩	暮春鴛
暮春月	山家暮春	浦暮春
三月盡		

暮部

更衣 一	朝更衣	都鄙更衣
餘花	尋餘花 二	殘花
山殘花	庭新樹	卯花
夜卯花	社卯花	里卯花
葵	牡丹	郭公
待郭公 三	人傳郭公	郭公未遍 四
初郭公	遠郭公	曉郭公
夕郭公	夜郭公	深夜郭公
山家郭公	杜郭公 五	湖邊郭公
泊郭公	郭公遍	早苗
採早苗	山田早苗	莒浦

軒昌浦

夏本六

五月雨久

河五月雨

湊五月雨

螢

河邊螢八

澤螢

菼端螢

夏月

雨後夏月

山邊菅浦

五月雨

五月雨晴

他五月雨七

流五月雨

夕螢

橋邊螢

野螢

晚夏螢

山夏月九

夏雨

夜盧橋

曉五月雨

杣五月雨

浦五月雨

野五月雨

水邊螢

江螢

草間螢

窓茶螢

浦夏月

夏朝

夏草

庭夏草

鵜川

水鷄

夕立風

杜蟬

夕納涼土

泉避暑

河夏後

野夏草

瞿麥

照射

蓮

夕立雲

夕蟬

水邊納涼

志賀幸濟夏

六月後

風前夏草

籬瞿麥

曉更照射十

白雨

山蟬

納涼

泉

猪野夏

草菴和奇集類領目錄二

秋部

早秋 一

朝初秋

初秋朝方

兼侍七夕

七夕露

七夕馬

萩

萩露

萩

早秋風

初秋風

殘暑

七夕月

七夕河

七夕後朝

夜萩 三

庭萩

萩露

初秋

初秋方 二

七夕

七夕雲

七夕橋

閏月七夕

深夜萩

庭萩風

野外萩

薄

草花 四

庭草花

霧中草花

槿

曉露

野外露

秋風

田家秋風 六

秋聲帶雨露

秋植物

月前薄

朝草花

閑吾草花

月前草花

小鷹狩 五

野禽

野外秋禽

海邊秋風

秋雨

秋天象

秋田

可管

草花露

草花露風

月照草花

露

野徑禽

秋夕

野秋風

秋夜雨

秋動物

秋

鹿

霧中鹿

夜鹿

暮山鹿

田家夕鹿

鹿交草花

山家初馬

夕馬 八

曉虫

月前虫

蟻蛄聞虫

月前鹿

朝鹿

遠鹿 七

野鹿

閑居鹿

馬

月前初馬

田上馬

夕虫

蟻夕虫

虫聲幽

月前聞鹿

夕鹿

山鹿

田家鹿

鹿聲何方

朝初馬

明月聞馬

虫

夜虫

閑庭虫

霧

朝霧	暮山霧	河霧
河上霧	湖上秋霧	浦霧
渡霧	田上霧	駒迎
月	八月十五夜	待十五夜月
九月十三夜	深山見月	山家見月
雲間月	霧間月	霧上月
月亦霧	月亦晴雨	月亦霧
月映霧	月似鏡	曉月
曉更月	曉月臥雲	海上曉月
夕月	山月	月出山
暮山月	深山月	嶺月

中卷月三二

谷月	園月	野月
野外月	野徑月	野露映月
閑月	橋下月	澤月
江月	江清月近人	何月
海月	海上月	海邊月
湖月	湖邊月	浦月
鳴月	渡月	故鄉月
故鄉月	里月	山家月
山居月	田家月	古寺月
空廂月	竹間月	月亦鷄
月亦鳴	月亦猪	月亦簫

月系綱	月系綫	惜月
對月思音	月乃秋友 十四	池月秋久
伯母奔山秋	鏡山秋	宮城野
擣衣	月系擣衣 十五	夕擣衣
夜擣衣	海邊擣衣	遠村擣衣
山家擣衣	里擣衣 十六	擣衣幽
鳴	鷄	野鷄
菊	月系菊	菊籬月
菊露	紅葉 十七	夕紅葉
月系紅葉	月系楓	山紅葉
紅葉遍	名系紅葉	晉秋 十八

晉秋月	冬部	初冬 一	初冬時雨	時雨
九月尽夜		風系時雨 二	曉時雨	朝時雨
夕時雨		海邊時雨	夜時雨	屋上時雨
落葉雨混		落葉	落葉霜 三	落葉
河落葉		庭落葉	殘菊	殘菊
朝霜 四		楊霜	寒草	寒草
夕寒草		杜寒草	野寒草 一	野寒草 一

野徑寒茅	閑庭寒茅	寒茅
冰	朝冰	池冰 五
江冰	灑冰	河水
湖水	冬月	深山冬月
河冬月	河上冬月	湖冬月
寒夜月	推柴	千鳥
夜千鳥 六	海邊千鳥	浦千鳥
磯千鳥	浮千鳥	水鳥
曉水鳥 七	夜水鳥	雪中水鳥
河水鳥	澤水鳥	池水鳥
一鳥過寒水	鳴	網代

十卷目二四

夜網代 八	扉霰	古屋霰
篠霰	竹霰	霰似玉
雪	初雪 九	山初雪
庭初雪	淺雪	積雪
曉雪 十	曙雪	朝雪
夕雪	山雪	深山雪
遠山雪	山路雪 十一	嶺雪
山月照雪	林雪	野雪
野外雪	園雪	園路雪
園路曉雪	行路雪	橋上朝雪
河邊雪	海邊雪	湖雪

湖邊雪	浦雪 十二	庭雪 一
松雪	杉雪	雁鳥狩
夕鷹狩	炭竈	遠客竈
炉火	曉炉火	神樂 十三
佛名	雪中早梅	手梅薰風
峯雪	峯雪 十四	山家茶着
欲歲暮	冬夜	冬動物
冬遠懷		

中卷目二八五

草菴和奇集類題目錄三

懣部

初懣 三	思不言、	忍、
忍久、 四	忍淚、	手忍、
忍待、	忍不逢、	忍不遇、
忍掣、	忍絕、	聞、
聞聲、	見、 五	祈、
祈神、	祈久、	祈身、
誓、	掣、	掣久、
掣後隱、	掣絕、	三年不見書
馴、	鈍、 六	不逢、

不遇、
 夕待、七
 待空、
 逢、
 期逢、
 後逢、
 期別、
 後朝、
 、不遇、
 歎無名、
 絕後頭、
 來不留、
 每夕待、
 連夜待、
 初逢、
 稀逢、
 旅宿逢、
 曉別、九
 後朝切、
 、不會、
 顯、
 獸、
 待、
 期待、
 曉待、
 祈逢、八
 絕後逢、
 別、
 別後會難期
 逢不逢、
 立名、
 絕頭、
 被獸、十

中卷目二十一

陳、
 風聲催、
 久、
 近、
 斤思
 恨、
 恨絕、
 絕不逢、
 月前待、
 春、
 霧中、
 變、
 被妨人、
 旧、
 隔、
 思
 忍恨、土
 絕、
 絕祈、
 月前絕、
 夏、
 冬、十三
 約遠、
 稀、
 遠、
 隔遠路、
 被忘、
 互恨、
 絕久、十二
 月前、
 月前別、
 秋夕待、
 曉、

夜、	名取、	面影、	、月忌、	、月恨、	、烟、	、霜、	、杪、	、洞、	、沼、	、溪、
不通夜、	木幡里、	寄月、	、月别、	、雲、	、霧、	、雪、	、野、	、池、	、河、	、湖、
限一夜、	老、	、月初、	、月增、	、風、	、雨、	、山、	、原、	、隴、	、海、	、浦、
								十五		

、恒、	、思草、	、木、	、馬、	、虫、	、鏡、	、衣、	、弓、	、袋、
、草、	、管、	、花、	、水馬、	、侯、	、枕、	、紉、	、絲、	、悉天象、
、忍草、	、藻、	、花忍、	、獸、	、玉、	、筵、	、書、	、繩、	、悉雜物、

草菴和詩集類題 四

雜部

天象 一

天色無情談

流水浸雲根

曉

曉霞寬

海上曉雲

山

山路雲

澗水

長河似帶 二

旅

夕の如束

夕旅

山夕旅

冥路旅

海旅

河邊旅

湖邊旅

寒旅

秋旅

月希旅

冬旅 三

雪中旅

旅行

朝旅行

月希旅行

旅宿

月蒞旅宿	旅宿夢	羈旅
羈中嵐	羈中友	羈中見月
旅泊 <small>四</small>	旅泊雨	旅泊夢
伯舟	舟行夜已深	海路
海路日暮	山家	山家嵐 <small>五</small>
山家夕嵐	山家松	山家松老 <small>六</small>
山家松	山家獸	山家水
山家路	山家送年	降侶夕歸
闲居	田家	田家水
田家烟	草	蒼苔滿山徑
竹色不改	竹韜多春	窓竹

松	松風	薄翠松風
嶺松	谷松年久	浦松
庭松	名取松	松知春 <small>八</small>
松色春久	雜植物	鶴
鳴鶴	庭上鶴	鶴契遯年
曉鷄	閑鷄	羈中鷄
都鳥	鷗	夕鐘
雨後眺望	海眺望	海上眺望
山家眺望	羈中眺望	海边夕望
寄市雜	述懷 <small>九</small>	寄月 <small>一</small>
寄雲 <small>一</small>	曉 <small>一</small>	寄末 <small>一</small>

山家	一依人	老後
一候	寄侯	寄身
寄情	寄世	寄身
羈中	寄神	寄身
懷舊	表傷	獨懷旧
寄夢懷旧	表傷	無常
夢	神祇	寄花神祇
寄鏡神祇	秋神祇	社頭杉
祝	寄道祝	寄浦祝
寄松祝	寄花祝	寄鏡祝
寄神祝	寄神祇祝	釋教

教水	寄花祇教	大日
聲因	菩薩	人男
色不異空空不異色	緣覺	不增不减
真實不虛	薩高王子因緣	宿揚王至
諸宝行樹及宝羅網出微妙音譬如百千種樂	同時俱作	普觀
無三惡趣願	阿弥陀至	觀至
經於千歲為於法故	無量壽至	法華經
亦不觀進取攝沓捕	安亦品	壽量及
宝樹多花果宛生所遊樂		嚴王只

植衆德本 勸業員 一切衆生悉有佛性 考

非實接故如空花等 唯識 安樂集

唯有淨土一門可通入路 往生禮贊

識颺神志觀難成就 往生禮贊

門之見佛後生淨土

身相神通樂

五妙境界樂

辰布 鳴海淨 富士山

塩竈浦 雷峯落照 比良淺

難波芦

雜躰 共

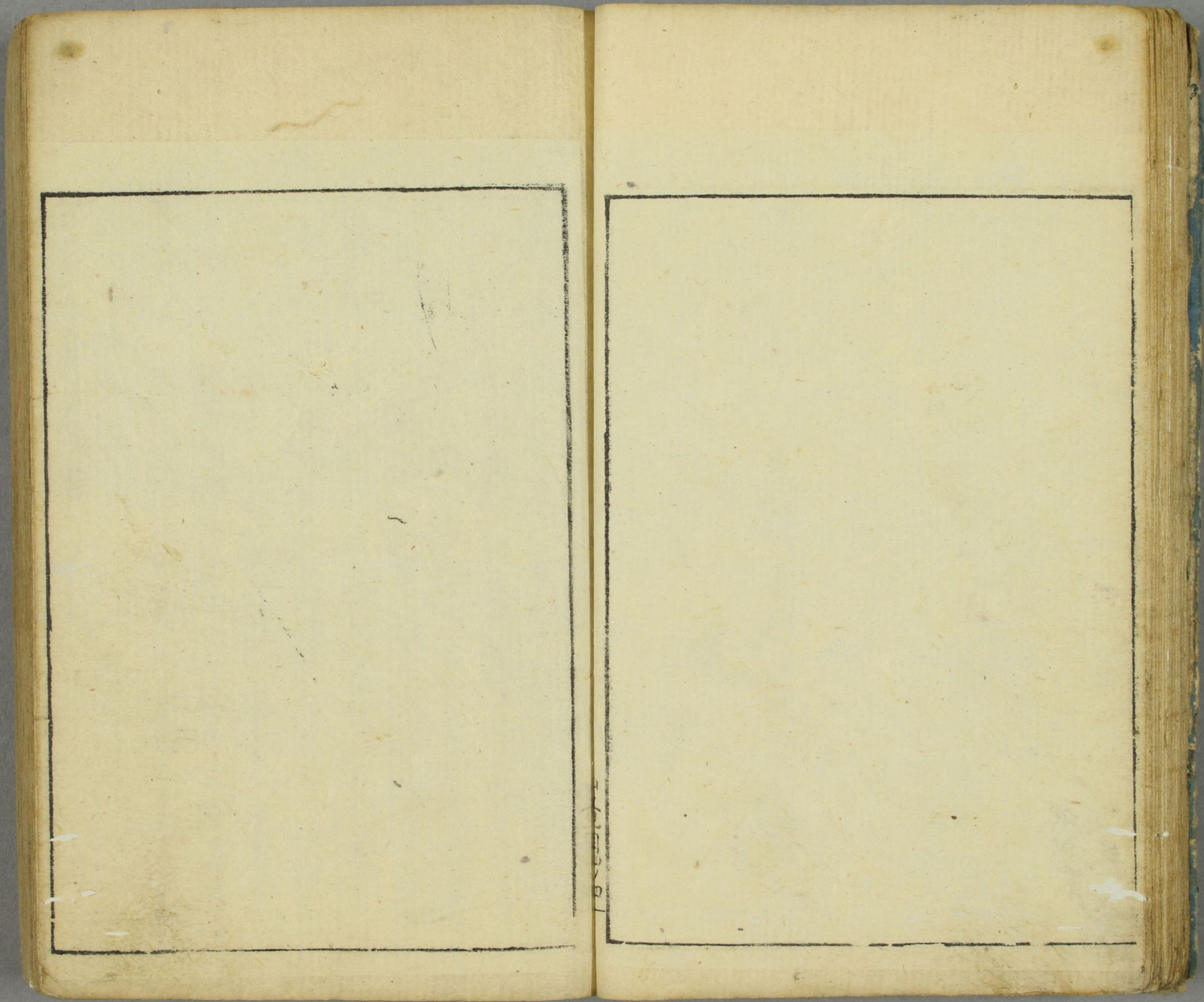
經哥 物名 折句

旋頭哥 姐女哥 誦諧

連哥 左神宮奉初百首

句類百首

講相八景



草菴和奇集類題

春部

立春

あまの御引りたりきつり山の古国山は春やまは
 新玉乃春まはるの朝日影まはる山は春まはる
 光しくふ水なれて山川の思ひは春まはる
 久遠のまはる久山神代も春まはる春まはる
 みくは山の風はまはるかまはるまはるまはる
 そわやまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 山海の春まはる春のまはるまはるまはるまはる
 まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 雅道海春まはるまはるまはるまはるまはるまはる

早春

海邊早春

早春霞

早春氷

初春

初春鶯

霞

曙霞
夕霞

あまの御引りたりきつり山の古国山は春やまは
 新玉乃春まはるの朝日影まはる山は春まはる
 光しくふ水なれて山川の思ひは春まはる
 久遠のまはる久山神代も春まはる春まはる
 みくは山の風はまはるかまはるまはるまはる
 そわやまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 山海の春まはる春のまはるまはるまはるまはる
 まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
 雅道海春まはるまはるまはるまはるまはるまはる

山霞

雲

東海を春のこころおぼれ乃山霞のそらとて
言けり霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
みゆまゆまを春の山霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
霧を酒もさりの霧の山霞のそらとては霞のそらとて
三橋乃山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
は霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
波の上の霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
霧を酒もさりの霧の山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
三橋乃山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
は霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
波の上の霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて

遠山霞

檜原霞

海霞

海邊霞

浦霞

湖霞

河邊霞

橋邊霞

雲

雪中雲

曉雲

曙雲

朝雲

鳴乃海のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
玉鳴や霧のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
岸のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
霧を酒もさりの霧の山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
三橋乃山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
は霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
波の上の霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
霧を酒もさりの霧の山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
三橋乃山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
は霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
波の上の霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて

三橋乃山霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
は霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
波の上の霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて
とては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとては霞のそらとて

夕鶯
谷鶯
鶯出谷
故鄉鶯
野鶯
鶯為友
子日祝
若菜

山花の露かたはなすもよほくもつゆの雪の空
ぬきわ打如く波をたけりて谷の戸より寸草を鳴
らりや打如く谷の古果は鶯の出ても草花の春風は
風をてけ白雲のたそがれにみまうりて言を打
あそびて立出さるる春の跡乃たあそび言を
竹をのぞききり秋夜はなほて我をたけ鶯を
子日てしつる跡の松のたけをらるる花を
若菜梅の花をたけりて言をたけりて言を
きりて言をたけりて言をたけりて言を
春風かたはなすもよほくもつゆの雪の空
ぬきわ打如く波をたけりて谷の戸より寸草を鳴

雪中若菜
野若菜
澤若菜
春雪
淺雪

あそびれつともたけまの白雪の跡乃たあそび言を
春風かたはなすもよほくもつゆの雪の空
ぬきわ打如く波をたけりて谷の戸より寸草を鳴
らりや打如く谷の古果は鶯の出ても草花の春風は
風をてけ白雲のたそがれにみまうりて言を打
あそびて立出さるる春の跡乃たあそび言を
竹をのぞききり秋夜はなほて我をたけ鶯を
子日てしつる跡の松のたけをらるる花を
若菜梅の花をたけりて言をたけりて言を
きりて言をたけりて言をたけりて言を
春風かたはなすもよほくもつゆの雪の空
ぬきわ打如く波をたけりて谷の戸より寸草を鳴

山残雪
山月の素の雪乃の白を
て悠々一休一休の雪

野渡雪
餘寒
二月餘寒
梅
春の雪は白雲の如く
是乃心の白を
依保能の心なる名も
梅花候初一もあられ
玉ほこのなりのあはれ
白雲の如く

梅風
梅薰風
梅薰枕
梅薰袖
梅香薰袖
春の雪は白雲の如く
是乃心の白を
梅花候初一もあられ
玉ほこのなりのあはれ
白雲の如く
春の雪は白雲の如く
是乃心の白を
梅花候初一もあられ
玉ほこのなりのあはれ
白雲の如く

△七トアル方ハ詠下
大人ノミキ

雪中梅

朝梅

夜梅

月下梅

行路梅

里梅

庭梅

雨庭梅

古宅梅

雪の影を梅の影に照らすは雪の梅の影に照らす

梅の影を朝の光に照らすは朝の梅の影に照らす

梅の影を夜の光に照らすは夜の梅の影に照らす

梅の影を月の光に照らすは月の梅の影に照らす

梅の影を道の光に照らすは道の梅の影に照らす

梅の影を里の光に照らすは里の梅の影に照らす

梅の影を庭の光に照らすは庭の梅の影に照らす

梅の影を雨の光に照らすは雨の梅の影に照らす

梅の影を古宅の光に照らすは古宅の梅の影に照らす

梅の影を古宅の光に照らすは古宅の梅の影に照らす

柳

柳風

雨中柳

柳露

春月

あけぼのの花田のまはりにて柳の影に照らす

風影を柳の影に照らすは柳の影に照らす

柳の影を雨の光に照らすは雨の柳の影に照らす

柳の影を露の光に照らすは露の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

柳の影を春月の光に照らすは春月の柳の影に照らす

備乃の事はたも恋のありあはし物に居の如
陶居の事を人控てり物に程をたそあ春暁
うらもの忠も我が本別てい程をたそあ春暁
と程をたそあ春暁の事のおとあ春暁の事
花もたそあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事
おとあ春暁の事のおとあ春暁の事

霞中帰鳥

なまはるの霞中帰鳥の事のおとあ春暁の事

曉帰鳥

山をたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

夕帰鳥

夕をたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

夜帰鳥

月影をたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

深夜帰鳥

人言をたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

海邊帰鳥

みもあ秋もたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

湖帰雁

志がたのうらたそあ春暁の事のおとあ春暁の事

鳩の事

鳩の事のおとあ春暁の事のおとあ春暁の事

水御陶庵

三月三日

曲水宴

雄

雲雀

原雲雀

鸞

梨花

花

春をたぐりてさし上りて風を吹くかきさるる
 るる花の蓋をたぎらぬことかきさるる
 月の影をみゆればかきさるるに相子たれ也
 かきさるる事ふもいふことかきさるる
 志もかきさるる(の事かきさるるかきさるる)
 ことかきさるるかきさるるかきさるる
 木のけいさるるかきさるるかきさるる
 春ことかきさるるかきさるるかきさるる
 かきさるるかきさるるかきさるるかきさるる
 とれのかきさるるかきさるるかきさるる
 とれのかきさるるかきさるるかきさるる

あふのたまごとも山橋かきさるるかきさるる
 春ことかきさるるかきさるるかきさるる
 毎花も人もきさるる三福山の雲も白くかきさるる
 且ほのさるるのさるる白くかきさるる
 春ことかきさるるかきさるるかきさるる
 とれのかきさるるかきさるるかきさるる
 白くかきさるるかきさるるかきさるる
 山橋ももかきさるるかきさるるかきさるる
 なさるるかきさるるかきさるるかきさるる
 かくかきさるるかきさるるかきさるる
 とれのかきさるるかきさるるかきさるる

△ハ見セバヤクトカリ
思ヒテノ心

△ハ見セバヤクトカリ
本母大人ノ心

春事のゆめまた山乃のまの真と花なり
さるるをねしむるやけなまのこころ
つよまぬまを人のもよまは掃草花の薫
さ本娘のいもをねる掃草白心より
咲て花乃見敷の程なまよまの草も
おのつらぬとれ本事もまの心
さるるまをてらちの掃草花の薫
後また白のまをねるまの心
さらけむるまの心
つよの山乃をてらちの掃草花の薫
みよまの心

春事ゆめつたまのまの程なまの心
咲て花乃見敷の程なまよまの草も

東山は位何より氏の花の整り
後ヤミ

山乃の程なまの心
か

東山は位何より氏の花の整り
後ヤミ

ふね

春花

夜思花

月照花

月落花

雨中花

雨落花

霞中花

いふまじも揚もるはかきとすえく春の心端

春の車乃月々まらぬ花をてしつ山の花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を

旅宿花

鞞中花

山花

山花

暮山花

山家花

い春の月々山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

山花乃旅宿てしつは花乃旅宿

花乃旅宿てしつは花乃旅宿

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

ふらふらの春の香ありては花咲山の後の位なり
又の口かこもりやうゆ

春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

宗居花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

古溪花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

杜花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

關花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

里花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

原花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

池邊花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

河邊花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

橋邊花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

岡邊花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

海邊花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

浦花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

濱花

いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり
いづれも春の香ありては花咲山の後の位なり

禁中花
故御花

古寺花
名不花
庭前花
松隔花
花更松
花如雪

楊花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり

花三老

寄花迷懐

寄花懐舊

更てたは方のき花は古寺の古き花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり
花の如く散るる花は古寺の古き花なり
春風にて花を吹くは御花の如く散るる花なり

西行上人位侍りらる雙林寺といふ寺ありて
かの忌日ありて追善し侍りし次子人に云ふ

残のたぐい毎青紫の標もも今も忍くぬ揚葉
 未束のり後ひよあはて揚花散つて花小嵐吹たわ
 さつとこれ林末の種もあはる海苔のたれまじり
 千と千の君をつりりて風吹るも海苔のたれまじり
 けいふ種もあはる風吹るも海苔のたれまじり
 立波の寺あはる花小嵐吹たわ
 今此川ちねん揚花散つて花小嵐吹たわ
 ちつとこれ地の玉露もあはる海苔のたれまじり
 けいふ種もあはる風吹るも海苔のたれまじり
 今此川ちねん揚花散つて花小嵐吹たわ
 ちつとこれ地の玉露もあはる海苔のたれまじり
 けいふ種もあはる風吹るも海苔のたれまじり

水郷落花

河落花

池落花

園落花

行旅落花

夕落花

情落花
 青蓮院空まよわく花小嵐吹たわ
 運法寺のまよわく花小嵐吹たわ
 空山如魚
 今此川ちねん揚花散つて花小嵐吹たわ
 ちつとこれ地の玉露もあはる海苔のたれまじり
 けいふ種もあはる風吹るも海苔のたれまじり
 今此川ちねん揚花散つて花小嵐吹たわ
 ちつとこれ地の玉露もあはる海苔のたれまじり
 けいふ種もあはる風吹るも海苔のたれまじり

藤

我為より作れりなき人の折れりてや、
此の世の只一折れ花のなきに、
存りしれ折れぬに、
存りしれ折れぬに、
存りしれ折れぬに、

水邊藤

水邊藤 池藤
松上存
昔春存
立陶の春存あり、
存りしれ折れぬに、
存りしれ折れぬに、
存りしれ折れぬに、

春暁

春天象
春地儀
春欲暮
暮春

暮春月
暮春鶯

△バハの子
本居海々々々々

白雉山危上の竹乃、
あはれに、
橘咲りて、
春の光、
花の影、
暮の影、
花の影、

山家暮春
浦暮春
三月盡

柳り月日のまぬ山屋に花を信る春を
中流のまを流るる海舟のりまを
りまのまを流るる夕樹見ゆるまを
まを流るるまを流るるまを
いふまを流るるまを流るるまを

里丹花

葵

牡丹

郭公

葵の葉はふたふたに生れ花は赤く
 秋の風をしのぎて咲く花は
 牡丹の花は白く咲く花は
 郭公の花は赤く咲く花は
 里丹の花は白く咲く花は

入道

入道の花は白く咲く花は
 侍候の花は赤く咲く花は
 侍候の花は赤く咲く花は
 侍候の花は赤く咲く花は

侍候

侍候の花は赤く咲く花は
 侍候の花は赤く咲く花は
 侍候の花は赤く咲く花は

人傳郭々

野を初軒古符屋中へ下す毎々物屋内なる
かりりもあまの志は世の世にあらはれし
ことなるを思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり
あまの心を思ふに心を痛めたるに似たり

郭々未遍

初郭々

遠郭々
曉郭々

わつたにうらなひの心は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に
別は初軒の屋に別は初軒の屋に

外傳
又傳

夕郭々
夜郭々

山の端まきしんはる横のよきあはるの村鳥を
斬りぬのきよせを肉をのりも志のふつと暮
月も山のあけを惜ばるを知らぬも
もる屋の影の枕をきかぬ未済東乃山郭々
村鳥存現をけしきい今一季のよけさるわは
小鳥あふそわわの軽とささなうけつな
月影の揺るもさるもあまをきくに肉を
きかぬまの人の屋を肉をほりもき初着
山家郭々 け屋はれつ重なり子親なるや山のねを
やう屋さるほを竹郭

暖夜郭々
山家郭々

け屋はれつ重なり子親なるや山のねを
やう屋さるほを竹郭

杜郭々
湖邊郭々

け屋はれつ重なり子親なるや山のねを
やう屋さるほを竹郭

泊郭々
郭々遍
早苗

け屋はれつ重なり子親なるや山のねを
やう屋さるほを竹郭

山田早苗
早苗

五月雨久

五月雨久なるは、我をたふす毎を中たせり
あまのふれやとらるる、越東のぬる、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

五月雨晴

五月雨晴なるは、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

五月雨

五月雨なるは、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

五月雨

五月雨なるは、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

五月雨

五月雨なるは、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

五月雨

五月雨なるは、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、
あまのふれや、乃、朝、

野麥草

加りよらんたふは野麥乃實秋の揚くきるは

出代の上中村の下の草の結くころは是より比る

後深き野中きおぼせくむす身小草を志しん

風前麥草

よ草の志したるは秋の葉ははきとる野人の風

庭裏草

よは乃秋の志しんは秋の葉ははきとる野人の風

瞿麦

あつこの野中は秋の葉ははきとる野人の風

とさつ乃は乃草葉籠もるははきとる野人の風

雜瞿麦

やあきくゆふゆふは秋の葉ははきとる野人の風

鶉川

玉鶉や土根をの草ははきとる野人の風

う鶉川梅草は山の中をよ下ははきとる野人の風

照射

後草乃春をかたは秋の葉ははきとる野人の風

曉更照射

よあきくゆふゆふは秋の葉ははきとる野人の風

水鶏

あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風

蓮

白鳥の南ははきとる野人の風

白雨

夕立の秋の葉ははきとる野人の風

夕立風

日影の夏ははきとる野人の風

あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風
あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風
あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風
あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風
あまの原くくは秋の葉ははきとる野人の風

定海傳教勸學院の傳子より遊のあり乃名取を法
よりきこく人々小新なるを傳し

志賀幸高

みよきより名をうけてこゆ也三つのもむ松坂屋と伝

猪野友

福妻の官のさうあなまるといふさうの山塚屋

河原核

と伝あり秋の雨日事の川乃まふ多股さく風さく

六月核

以後一と麻のさうは川の漱のあまのあまのあ

水の面にあたる存をいふとす所傳のさやと東海
みよきとてうへぬさうは田川夕附ちの巻と傳り
麻の葉よ申はさうはすく以後は傳の福妻と
とよりの河原まうは傳てなはははははははは

七夕病
を病まふは病織女乃り此世のそとや
新河剛断るは中津波や
七夕河
はつたあはれは鶴のふりか
七夕橋
はつたあはれは鶴のふりか
七夕島
馬の神公あはれは鶴のふりか
七夕後朝
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
閏月七夕
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか

夜萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
深水萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
庭萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
庭萩風
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか
萩
あきこの川舟はつたあはれは鶴のふりか

野外秋

小秋系を秋と稱す秋の色は青と白と
右系を支光者なり仁和寺に傳ゆりしころ春の如
く青と白のよき色なり秋の氣をさすころはか
ゆりし色なりなり

薄

秋の氣の薄き色なり花の薄なるは
くつきの色にさす色なり秋の氣の薄なるは
夕陽の色なり秋の氣の薄なるは秋の氣を吹
く色なり遠く鳥の色なり秋の氣の薄なるは
野の色の色なり秋の氣の薄なるは秋の氣を
さす色なり秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは

月花薄

刈萱

草花

草花は秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは

朝草花

草花露

朝草花は秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
草花露は秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは
秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは秋の氣の薄なるは

庭草花

深居草花 ありあけのうららかなるに
 草花靡風 秋風は色をいよの浦のよき
 霧中草花 物よせうららかに花を
 月並草花 小秋のうららかに花を
 月照草花 秋のうららかに花を
 槿 月並のうららかに花を

小鷹將 秋風のうららかに花を
 露 草の葉はまゆをいよの浦のよき
 曉露 草の葉はまゆをいよの浦のよき
 野露 秋風のうららかに花を
 野後露 小秋のうららかに花を
 野外露 秋風のうららかに花を
 野外秋露 秋風のうららかに花を
 秋夕 秋風のうららかに花を

田家鹿

あまのほろもきこひさしき鹿も小田のさか

田家夕鹿

秋の田乃らほのま秋のけりりき月毎まきとゆめ

閑居鹿

はまにまのまきまのまけりてまきまのまのま

麻色何方

ひまふたの風のまきまのまのまのまのま

麻衣草花

まのまのまのまのまのまのまのまのま

馬

ぬまのまのまのまのまのまのまのまのま

朝初馬

かひまきまのまのまのまのまのまのまのま

山家初馬

まのまのまのまのまのまのまのまのま

月希初馬

まのまのまのまのまのまのまのまのま

明月御馬

まのまのまのまのまのまのまのまのま

夕馬

夕馬のまのまのまのまのまのまのまのま

田上馬

田上馬のまのまのまのまのまのまのまのま

虫

虫のまのまのまのまのまのまのまのま

曉虫

曉虫のまのまのまのまのまのまのまのま

夕虫

夕虫のまのまのまのまのまのまのまのま

夜虫

夜虫のまのまのまのまのまのまのまのま

月希虫

月希虫のまのまのまのまのまのまのまのま

海を渡る鳥は多し其の如く出の如く遊ぶの如
 弟の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
 秋の末の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
 秋の末の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如

霧
 霧の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
 霧の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如

朝霞
 朝霞の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
 朝霞の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如

暮山霞
 暮山霞の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
河身
 河身の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
河上霞
 河上霞の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
湖上秋暮
 湖上秋暮の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
浦霞
 浦霞の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
渡霧
 渡霧の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
田上露
 田上露の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
駒迎
 駒迎の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如
月
 月の如くはるはるを多し其の如く遊ぶの如

おきぬらいつれなまのりつあまらちの影を移し
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
口まそふらふらふらふらふらふらふらふら
はあそふらふらふらふらふらふらふら
みうはらふらふらふらふらふらふら
月影のふらふらふらふらふらふら
風まふらふらふらふらふらふら
いふて月影のふらふらふらふら
秋の東は照月なまのりつあまらちの影を移し
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
待十五夜月 かねてあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

八月十五夜

待十五夜月

九月十三夜

深山見月

山家見月

雲間月

霧間月

霧上月

月初霧

月初内雨

月初露

月眩露

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
はあそふらふらふらふらふらふら
みうはらふらふらふらふらふら
月影のふらふらふらふらふら
風まふらふらふらふらふら
いふて月影のふらふらふらふら
秋の東は照月なまのりつあまらちの影を移し
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
待十五夜月 かねてあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

月似鏡

曉月

曉更月

曉月歇雲

海上曉月

夕月

山月

月影波りてうつる二心厚し道神代の鏡如し
八方社花のまらぬ月とあまの限りわきま
暁中より暁花よ影をくく投入くは月をさる如
月くはのこころふゆふ物をとけみ影をさる如
やうつらなるはつよもさる月を映く仲津白波
深きうの秋のむをいふ是月待知り夕花をさる
よのへらうあまはまもさる月を映く仲津白波
山端より夕花をさる月を映く仲津白波
くさりけりまもさる月を映く仲津白波
まのちの月くわたりは物の影く相よ山をさる
白波乃しは影乃花の月影をさる月を映く仲津白波

月出山

暮山月

深山月

かまらり山のあたるの限あまの影をさる月を映く仲津白波
月くはまもさる月を映く仲津白波
まのちの月くわたりは物の影く相よ山をさる
このまもさる月の影をさる月を映く仲津白波
影をさる月を映く仲津白波
山端より夕花をさる月を映く仲津白波
くさりけりまもさる月を映く仲津白波
まのちの月くわたりは物の影く相よ山をさる
秋の影をさる月を映く仲津白波
影をさる月を映く仲津白波

嶺月

谷月

雲月

野月

野外月

野鐘月

野露映月 下紫まて露をりしきしをの秋夜を月影に
 関月 宿まきおぬの葉乃か月影をてさるるは
 橋下月 とも月のなをてりか人のあつあつをのなは
 澤月 うつろはつは月のやまふあきさうさ居やを
 江月 ぼろぼろのあもるまてつぼり下は月をやれ
 伊勢の海やまのあつはのまてと凄まじくはる月
 みるに乃物なりあぬあか月の雲をく備も
 江清月近人 あまの汲汲たるは波にや有とを波に
 河月 舟は川乃まはるはなは流の影を流とさのて場
 舟は川立川霞のさるるはさるるてやれ月の影

舟の老側のさるるはさるるてやれ月の影
 山川乃あつは流のまてさるるは波をてり月
 月の海乃響のうに響たりも月をさるるは
 吹風の便務り舟中まの浪は月を接へるる人
 流況こまてさるるはさるるはさるるはさるる
 中はや響つるも海を人の社ありて月やれ
 番人の定ぬ者も秋の東にあられて月やれ
 ありしは波をさるるはさるるはさるるはさるる
 極る極るのあまき人のあつは月をさるるは
 いりてはの上はさるるはさるるはさるるはさるる
 鳥の鳴や海風をては月の影をさるるはさるる

湖月
 海上月
 海邊月

湖辺月

湖畔の隅に懸る月、は月の光を沈むとゆん
増やぬき、のらくく人を枯れし糧もこゝろ月をさそふ
後世乃岸の浦波名の下りて月よぬぬの程に
月をてゆきし糧もさるるにさしゆいづるく浦に
月影を糧をさるる海も人もかさを浦をさるる
志未まつ山海の夜中の月影さるるもあまの畑に
かそて月をれぬ人乃月をりてあまの畑に
ゆて後身りてあまの浦に波の岸に月よぬぬ
和泉の岸に岸もて波もりてあまの畑をさるる月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
月影をさるるもあまの浦に波の岸に月影

鴻月

渡月

故郷月

あそび残月
里月

里にありては身もあまの月影は附島の岸に波もり
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
月影をさるるもあまの浦に波の岸に月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影

山家月

山居月

田家月

古寺月

古寺の隅に懸る月、は月の光を沈むとゆん
増やぬき、のらくく人を枯れし糧もこゝろ月をさそふ
後世乃岸の浦波名の下りて月よぬぬの程に
月をてゆきし糧もさるるにさしゆいづるく浦に
月影を糧をさるる海も人もかさを浦をさるる
志未まつ山海の夜中の月影さるるもあまの畑に
かそて月をれぬ人乃月をりてあまの畑に
ゆて後身りてあまの浦に波の岸に月よぬぬ
和泉の岸に岸もて波もりてあまの畑をさるる月影
さるるも海もりてあまの浦に波の岸に月影
月影をさるるもあまの浦に波の岸に月影

月間月 秋夜の月をみるに秋の夜は静か
 竹間月 小枝の月影をみるに竹の影は
 月前鶏 月影の鶏鳴を聞くに鳥の鳴は
 月前鴨 月影の鴨鳴を聞くに水鳥の鳴は
 月前猪 秋夜の月影をみるに猪の鳴は
 月前篝 月影の篝火をみるに火の光は
 月前網 月影の網をみるに魚の影は
 月前後 月影の前後をみるに月の影は
 惜月 月影を惜むに月の影は
 對月思昔 對月思昔に月の影は

月万秋友 月影の秋友をみるに秋の影は
 他月秋久 他月の秋久をみるに秋の影は
 伯母弄山秋 伯母弄山秋をみるに秋の影は
 九月 九月の月影をみるに秋の影は

鏡山秋 鏡山の秋影をみるに秋の影は
 宮城野 宮城野の秋影をみるに秋の影は
 元盛 元盛の秋影をみるに秋の影は
 難波 難波の秋影をみるに秋の影は

秋の影をみるに秋の影は

月菊

汲くもさきぬらんそん花の蔭乃葉の下房

菊籬月

長月のまゆ乃月花事と雲と菊のなを白葉

菊露

菊の露の心も秋の事葉とて未花を天の白菊

康安元年九月内裏にて聖護院宮尊皇王法を

たごはるを新のよ重陽の日鍾深は平許よりゆ

手の上よりさう菊もさして早の葉の心也思えん

ふの心也

手の上よりさう菊もさして早の葉の心也思えん

大敷まこりゆりておちきり

とほほとせおち世を時わかれおちて葉のこころ

紅葉

秋深まきのかき山が紅葉なりとてもんを紅葉し

こころの紅葉の心は限るやなり時交の心もん

まのの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

まの紅葉もりゆりて早の紅葉乃秋の白葉

おちておちる紅葉をさしおちておちて

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

山紅葉

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

夕紅葉

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

月菊紅葉

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

月菊極

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

おちるの紅葉もんも山乃下葉のこころも樹も

晉秋處

以秋乃事師の涉牙を指てまゝは冬の時と
 ありて秋を始むる節日影自^るまのころ月影
 在^る内^のるをまゝとせり月の影秋やこれなり
 舟^のい^はる^まを^らりて秋^の後^の舟^の影^の秋^の影^の
 へ^らる^まを^らりて秋^の影^の舟^の影^の秋^の影^の
 九月處 加^へる^まを^らりて秋^の影^の舟^の影^の秋^の影^の
 九月處 建^てる^まを^らりて秋^の影^の舟^の影^の秋^の影^の
 閏九月處 考^へる^まを^らりて秋^の影^の舟^の影^の秋^の影^の
 九月つらりて秋^の影^の舟^の影^の秋^の影^の

おとす秋の事なきは秋の事なきは

草菴和歌集類題

冬部

初冬

しつはら秋をむりて山々の空の時を移まぬん
山に秋の風を移す時を移すは秋の風
とて移れしは移りし神を移すは移すは

初冬時雨

冬まねとわつてかきかき里わくけは乃時雨
移すは移すは移すは移すは移すは

時雨

とわくは移すは移すは移すは移すは
何國とて山に時雨を移すは移すは
葉の移すは移すは移すは移すは
移すは移すは移すは移すは移すは

大原路を去る時雨

去る時雨を移すは移すは移すは移すは
あまは移すは移すは移すは移すは
あまは移すは移すは移すは移すは
神を移すは移すは移すは移すは

風前時雨

去る時雨を移すは移すは移すは移すは
山に時雨を移すは移すは移すは移すは

曉時雨

去る時雨を移すは移すは移すは移すは
山に時雨を移すは移すは移すは移すは

朝時雨

去る時雨を移すは移すは移すは移すは
山に時雨を移すは移すは移すは移すは

夕時雨

去る時雨を移すは移すは移すは移すは
山に時雨を移すは移すは移すは移すは

夜時雨

志をなすはゆきをなすは定むる世成るはゆきなり

屋上時雨

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

海邊時雨

も海は北極の夜也の村雨ももは初に濡り移り

落葉

神をなすは東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

冬は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

落葉雨混

落葉霜

加はるは海は東の雲は移るはゆきも冬は冬に降内雨は

杜落葉
路落葉
河落葉

冬乃の信を杜の下陰にゆりて
と枯く木の陰路をゆく
今又と我の心は
大井川の流るる
福の河をのちと
お葉の雨をふりて

庭落葉

山乃下葉
庭の葉を
庭の面を
庭の面を

殘菊

朝霜
楊霜
寒草

朝霜のわらわら
楊霜のわらわら
今も秋の
加葉の
秋の
夕寒草
夕寒草

夕寒草

冬月

深山冬月
河上冬月
湖冬月
寒夜月
推柴
千鳥

月夜秋も葉をよめて砂はり秋の形をよめる
このまゝの影はひかへたあまの秋の落葉は月夜
よもたふも風の香をよめて雪の月のうら
まのうらまの葉をよめて風の香をよめて
秋の山は秋の山は秋の山は秋の山は
さるる月の影をよめて川は秋の山は
葉は川をよめてさるる鴨の上をよめて
池月の影をよめてさるる池の影をよめて
秋の山は秋の山は秋の山は秋の山は
さるる月の影をよめてさるる月の影をよめて
さるる月の影をよめてさるる月の影をよめて

夜千鳥

海邊千鳥

浦千鳥

夜千鳥
海邊千鳥
浦千鳥
夜千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
海邊千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
浦千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
夜千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
海邊千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
浦千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
夜千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
海邊千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて
浦千鳥の影をよめてさるる月の影をよめて

鳥浦よりなる鳥を養ふ事も致し然りと撰ぐれば
 いかに夕波の鳥を致し入るまゝにわかれ鳥が
 浮子鳥 浮子鳥は也法とて三保の松をよき波に
 性遅鈍をけしなれど好まざるもわかれしこ流
 白首の鳥をとりしり ことなれりしこ流も
 りのこゝろにわかれしり ことなれりしこ流も
 可なり

水鳥

鳥を養ふ事も致し然りと撰ぐれば
 冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も
 あらゆる水鳥をとりしり ことなれりしこ流も
 冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も

暁水鳥
 夜水鳥

冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も
 あらゆる水鳥をとりしり ことなれりしこ流も
 冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も
 あらゆる水鳥をとりしり ことなれりしこ流も
 冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も

雪中水鳥
 河氷鳥
 澤氷鳥

冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も
 あらゆる水鳥をとりしり ことなれりしこ流も
 冬川の氷は鳥がわかれしり ことなれりしこ流も

降き来あはれぬ程の体程の掛ふ心気は
音程の掛ふ程の心気は白く程の掛ふ心気は
とるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
はとるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
とるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
とるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
とるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
とるたも音程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

雪乃あゝ多希真白なり
心く程の掛ふ心気は白く程の掛ふ心気は

此一庄大敵今夏白夏の口流を平均なり こと
こと及と毎とわくは日ありてはまふの故なり
ことありては

天候もあつてふふはまふまふなり
ふふは波のありては 清雲はくまふ
殊にまふ山のふりては 大敵の勅書
よのきらぬは

大敵のふりては
あつては

遠山雪

このふりては

山初雪

このふりては

嶺雪

このふりては

山月照雪

このふりては

林雪

このふりては

野雪

このふりては

野外雪

このふりては

關雪

このふりては

關路雪

このふりては

關路曉雪

このふりては

行路雪

このふりては

楊上朝雪
河邊雪

海邊雪

湖雪

湖邊雪

浦雪

庭雪

松雪

杉雪

こゝに人なきは降雪よふに侍人らの楊柳
みればいと加ふるは風雪にやけり白雪
ゆの川流つたまのまきより吹く風よ雪降つ
清く霞のたふさく雪の意は彼ににほひの松
園子浦也と案の言存るたふさく波よりのまね
冬雪の雪を降つた清くは接ぐ雪も松の松
難波く紀伊のまき山まきやゆの波はまの白雪
はたの海もなるまきつははたは波よりの白雪
あつちやゆの雪は接ぐはまき山まき
志賀の浦に降雪よふの松も雪をむくま
はたは海もなるまきつははたは波よりの白雪

うもれぬ雪はゆのまの白雪の雪はの雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪
雪人乃孫のまきつははたは波よりの白雪
うもれぬ雪はゆのまの白雪の雪はの雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪
はたの海もなるまきつははたは波よりの白雪
と釣るまきつははたは波よりの白雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪
あつちのまきつははたは波よりの白雪

鷹狩

夕日尋かしのそのお非はいつ松のたきのつて
くねるも馬立るを此狩を人の秋より雲のをりて
陸奥乃位史の鷹の名と揚ぐ執てとわ狩を筆
より鷹の赤山乃月のやまをわたる路へを指すと
勢ぬまをのり来るとまに松の路のまはりもゆり
けりてやるまをまをまをわたりてや栗梅の
冬まをのりお遊ばはる燭の光をまのりかま
あまのまをまをまをて位樂乃里もわおまを
まをまをまをまをまをまをまをまをまを
曉のなをまをまをまをまをまをまをまを

夕鷹狩

炭竈

遠炭竈

炉火

曉炉火

神樂

佛名

雪中早揚

早梅熏風

十月ころ梅をこれ乃をたよりよりつけく孫は少漸
頼遠のまをに下仰

歳暮

かき作のまをのりて毎々暎揚の時ぬまを
みちかきまをまをまを十寸篠うらまをまを
わたりてまをのりて乃をたよりよりつけく孫は少漸
あつて乃をまをのりて毎々暎揚の時ぬまを

好来才よあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに
とてあはれをたのむに世のあはれをたのむに

歳暮雪

山家歳暮

歎歳暮

冬夜

冬動物

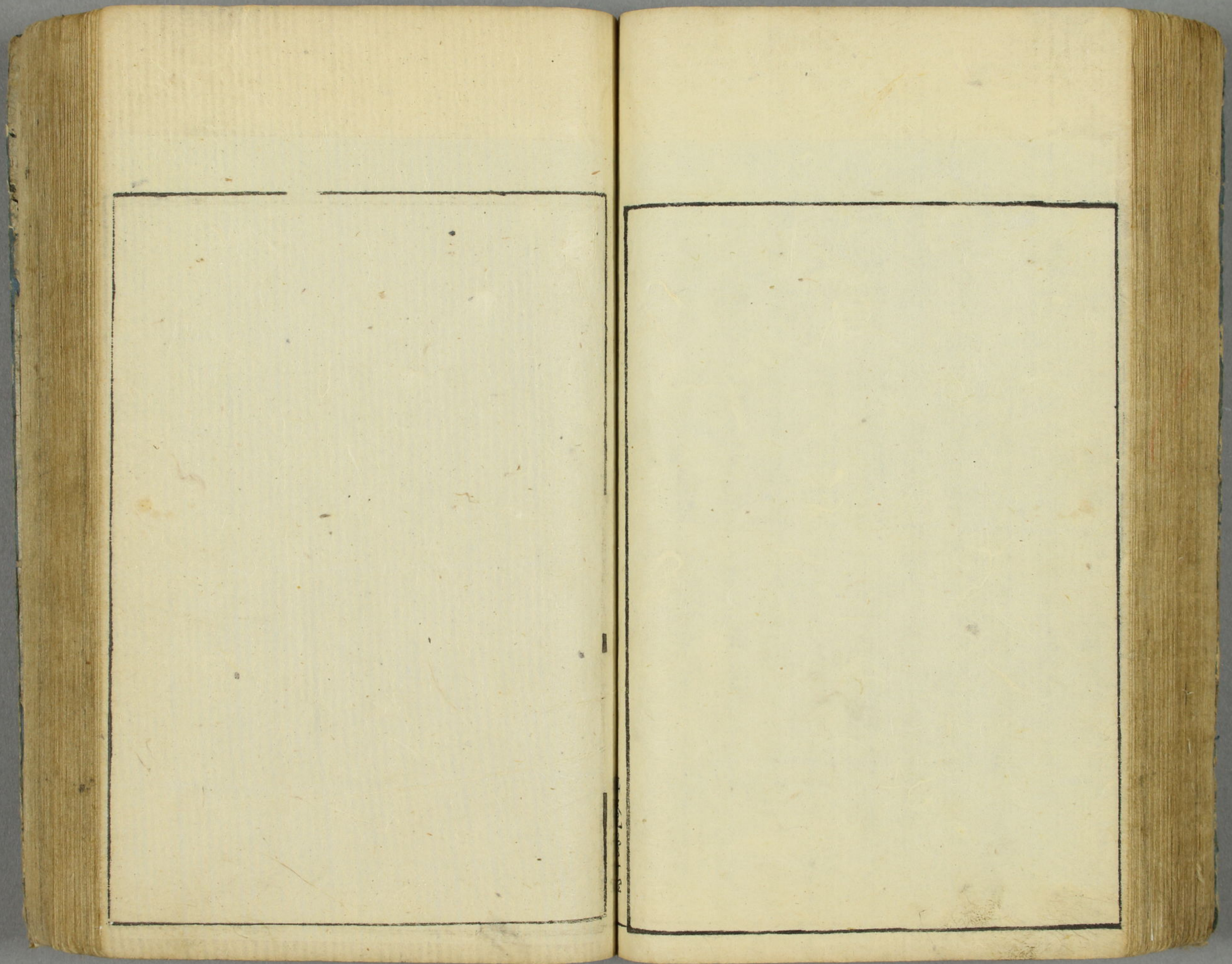
冬迷懐

冬夕景

古神主

おとろくそきぬをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに
あはれをたのむに世のあはれをたのむに

をたのむに世のあはれをたのむに



忌不違忌
忌不遇忌
忌發忌
忌絶忌

聞忌
聞拜忌

山の神事... 忌不違忌... 忌不遇忌... 忌發忌... 忌絶忌... 聞忌... 聞拜忌... 忌不違忌... 忌不遇忌... 忌發忌... 忌絶忌... 聞忌... 聞拜忌...

見忌
祈忌

祈神忌
祈久忌
祈身忌
誓忌
契忌

一東に... 祈神忌... 祈久忌... 祈身忌... 誓忌... 契忌... 祈神忌... 祈久忌... 祈身忌... 誓忌... 契忌...

擧久忠

ふじと忠のしきやい末乃かもきとちまらとまらん
かきよふのたけりかたまあて後之事はのうーと
ふたふたのむらむらきほにぬかぬかかりぬ
今又ふたのたけりかたまあて後之事はのうーと
ふじと忠のしきやい末乃かもきとちまらとまらん
かきよふのたけりかたまあて後之事はのうーと
ふたふたのむらむらきほにぬかぬかかりぬ
今又ふたのたけりかたまあて後之事はのうーと

契後隱忠

契絶忠

三年不見書
馴忠

三年不見書なふちの玉素成た神の心は雨のりも三夜つと
馴忠
ふたふたのむらむらきほにぬかぬかかりぬ
今又ふたのたけりかたまあて後之事はのうーと
ふじと忠のしきやい末乃かもきとちまらとまらん
かきよふのたけりかたまあて後之事はのうーと
ふたふたのむらむらきほにぬかぬかかりぬ
今又ふたのたけりかたまあて後之事はのうーと

祗忠
不逢忠

旅宿逢悪
別戀

こよひつゝおほきしむ事枕ふはなすき寝ぢりぬ
曉乃中ははなれぬ事しむるはなれぬ事
はなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事

解別恋

曉別恋

別後會難期
後朝恋

ちまひつゝ海の月日おほきしむるはなれぬ事
限あまの起おほきしむるはなれぬ事
小春本をたぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事
おほきしむるはなれぬ事おほきしむるはなれぬ事

後朝切恋
逢不遇恋

不會

はの國乃生田の杜やうん杜風吹く海はあや

月亦忘

とわら月うほの森かかふを影むか

月亦待忘

あふたふまの月た月替ふら

月亦能忘

今いふはつるに月も月も

月亦別忘

このまたふたは月白の社乃

春忘

思ふと山雜子者又忘人

夏忘

き社まわてきる月海が

秋夕待忘

秋の月替あふかほほ

霧中忘

あふたふまの月た月替

冬忘

水馬の下やがぬ

曉忘

あふたふまの月た月替

夜忘

あふたふまの月た月替

不通夜忘

あふたふまの月た月替

限一夜忘

あふたふまの月た月替

名取忘

あふたふまの月た月替

木幡里忘

あふたふまの月た月替

寄霜忌
寄雪忌
寄山忌
寄松忌
寄野忌
寄原忌
寄園忌

寄霜忌
 寄雪忌
 寄山忌
 寄松忌
 寄野忌
 寄原忌
 寄園忌

寄他忌
寄龍忌
寄沼忌
寄河忌
寄海忌
寄淺忌
寄湖忌

寄他忌
 寄龍忌
 寄沼忌
 寄河忌
 寄海忌
 寄淺忌
 寄湖忌

寄浦恋

あまのなごの舟りつまはるるを待て行はるる

寄垣恋

山街のちかみのまきとあまのりつまはるる

寄草恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるの下草

まはるるを待てなごの舟りつまはるるの下の草

とまはるるを待てなごの舟りつまはるるの下の草

なごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄忍草恋

日にてて人の影のほろろなるるを待てなごの舟りつまはるる

寄思草恋

日にてて人の影のほろろなるるを待てなごの舟りつまはるる

寄管恋

教はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄藻恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄木恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄花恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄花恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄鳥恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄水鳥恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄獣恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄虫恋

はるるを待てなごの舟りつまはるるを待てなごの舟りつまはるる

寄後恋
寄玉恋

けしきいそふの身の様さうさぬはなはなり
とふり玉のまを先片姿の加勢三つはなはなり
とてはなはなをのまのあつとてはなはなり

寄鏡恋
寄枕恋

と内をあらうとあつて福の市の中はなはなり
はなはなりを枕してあつてはなはなり
あつてはなはなりとてはなはなり

寄遠恋
寄衣恋

あつてはなはなりとてはなはなり
あつてはなはなりとてはなはなり
あつてはなはなりとてはなはなり

寄細恋

あつてはなはなりとてはなはなり

寄書恋

あつてはなはなりとてはなはなり

寄弓恋

あつてはなはなりとてはなはなり

寄絲恋

あつてはなはなりとてはなはなり

寄繩恋

あつてはなはなりとてはなはなり

寄筏恋

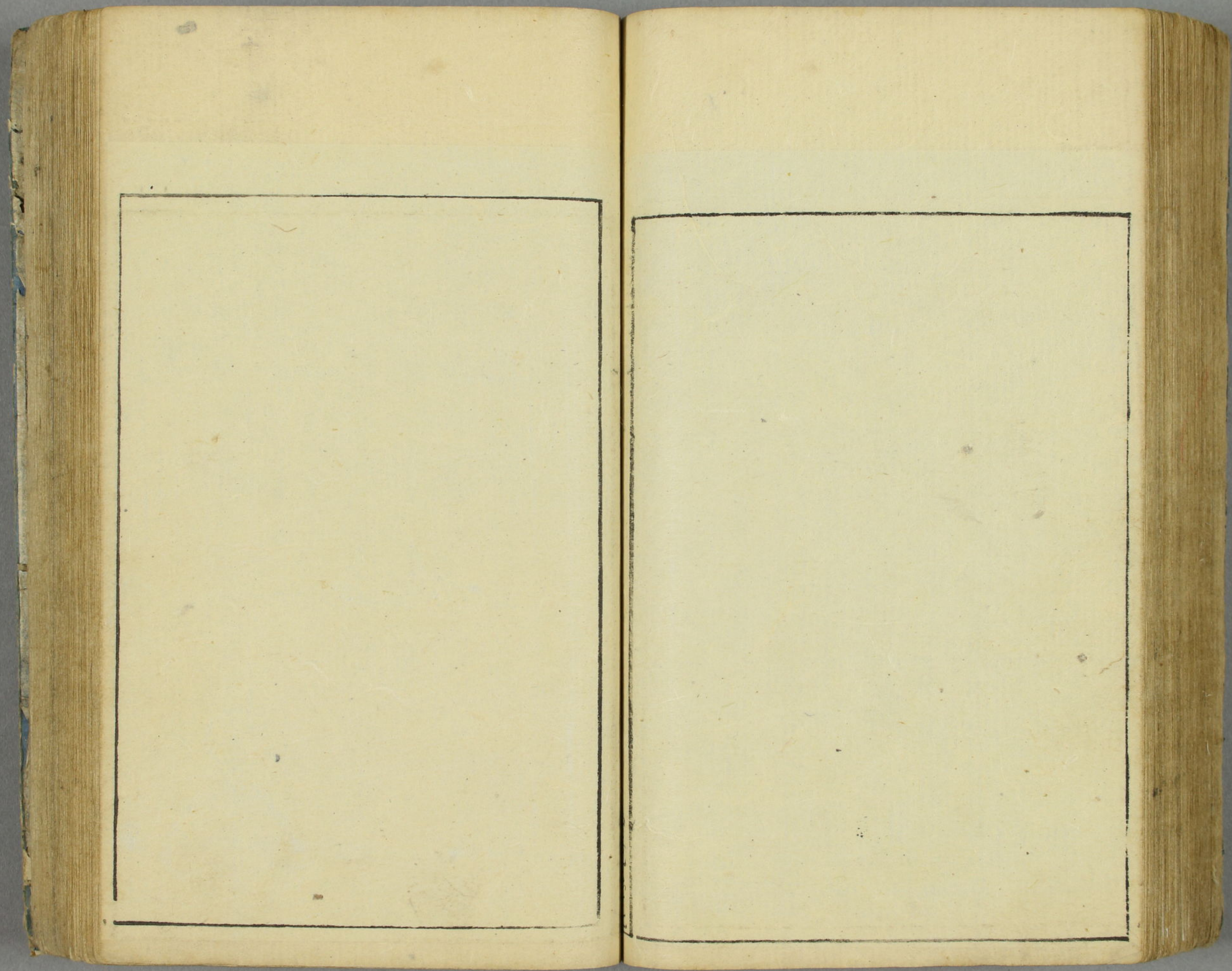
あつてはなはなりとてはなはなり

恋天象

あつてはなはなりとてはなはなり

恋雜物

あつてはなはなりとてはなはなり



柳菴和奇集類題

雜奇

天象

天象 一 天象と云ふは天の形を指す也

天色無情談 公なきむねをさかす人いふにわいをぬ余は

流水浸之根 如きやや白くの中を流るるまきの山

曉

曉 一 曉は朝の光を指す也

曉霞覺

曉霞覺 一 曉霞は朝の霞を指す也

海上曉雲

海上曉雲 一 海上の曉雲を指す也

山

山 一 山は地の高き所を指す也

山階雲

山階雲 一 山の階に雲を指す也

龍水

龍水 一 龍の水を指す也

熊所形智海

熊所形智海 一 熊の形を指す也

長河似帯

長河似帯 一 長河を指す也

旗

旗 一 旗を指す也

旗 一 旗を指す也

旗 一 旗を指す也

旗 一 旗を指す也

無題

無題 一 無題を指す也

修好 一 修好を指す也

修好 一 修好を指す也

以のり束

以のり束 一 以のり束を指す也

- 夕旅
- 山夕旅
- 冥路旅
- 海旅
- 河邊旅
- 湖邊旅
- 葦旅
- 秋旅
- 月旅

月旅は夜の静寂を感ずる旅なり
 山夕旅は山を登りて夕光を望む旅なり
 冥路旅は死の途程を想像する旅なり
 海旅は海を眺めて遠きを望む旅なり
 河邊旅は河を流るる水を見つめる旅なり
 湖邊旅は湖の静けさを感ずる旅なり
 葦旅は葦の揺れを聞きつゝ旅なり
 秋旅は秋の景色を愛する旅なり
 月旅は月の光を浴びて旅なり

- 冬旅
- 雪中旅
- 二葉前宰相義濃國守り
- 〜
- ゆ〜あ〜
- 旅行

冬旅は雪の白さを愛する旅なり
 雪中旅は雪の中を歩く旅なり
 二葉前宰相義濃國守りとは
 二葉前宰相義隆公の事なり
 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃
 〃 〃 〃 〃
 旅行は旅の楽しみを語る旅なり

旅人の旅の楽しみを語りつゝ
 旅の思い出を語りつゝ
 旅の苦楽を語りつゝ
 旅の美しさを語りつゝ
 旅の不思議な話を語りつゝ

朝旅行

月形旅行

旅宿

月形旅宿

旅宿

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

朝旅行

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

玉花流月を照らす空のふゆと雲の枕は

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

あまのつらねはけくたふち船高から雲海の家

山家夕嵐
山家松

さうけつ松を志のそけし松の嵐ふして折け
宇まふらの嵐かたあひそそまうまうあひま
いふれ松を成る人まうはま昭朝のまうを
まうまの松かまていふ人まの庵のうまま
山家松のまのあなだて別り風のまを淋あ
松まのを松もまままこのまあまこのまま
まうままてう松まのままも松まのま松風の
松まのう松まをまてうまま青て人あま
むなだまうまうまうまの松ま青のまま
庵まを松を仙洞まうま松村松まのま
まま松の嵐まま松のま松のま

漸りし松のうま松のま松のま松のま
らねてし

山家松老
山家杉
山家獣
山家水
山家路

漸りし松のうま松のま松のま松のま
山家松老のま松のま松のま松のま
山家杉のま松のま松のま松のま
山家獣のま松のま松のま松のま
山家水のま松のま松のま松のま
山家路のま松のま松のま松のま
春日社神木のま松のま松のま松のま
まま松の嵐ま松のま松のま松のま

きりけり村の事伝へし其の事も

山泉水

瑠璃乃池に於て是を山泉水と云ふ

浄侶又帰

寺に歸りて山泉水を飲めば其の味は

山家送年

さし山泉水を飲むと其の味は山泉水

閑居

酒を飲めば其の味は閑居の味

無類

一箇又其の味は無類の味

世中志つらむに侍りしは二室戸の廣室にて

その味は世の中を厭きて世をうらむ

仁和寺の廣室にて

世の中を厭きて世をうらむ

田家

山泉水の味は田家の味

田家水

小山田乃廣のきぬき水

田家畑

其の味は田家の味

草

其の味は草の味

蒼苔滿山煙

其の味は蒼苔の味

竹色不改

其の味は竹の味

窓竹

其の味は窓竹の味

松

松風

薄香松風

嶺松

谷松年久

浦松

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

松知春

松色春久

雑植物

鶴

鳴鶴

庭上鶴

鶴舞延年

曉鶏

春の松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

の葉は緑の葉は山に雲は雨の葉は冬に

白く松の葉は冬に枯れず五月に赤隈の松

閑鶏

七十のふくめんはけの跡身を定まま其の僧に心と
人を思ふを念するありありと出づる月もつゆに波とて
山流の舟もつゆに波とて流るる波の舟もつゆに
流るる世もつゆに波とて流るる世の舟もつゆに
流るる世の舟もつゆに波とて流るる世の舟もつゆに
流るる世の舟もつゆに波とて流るる世の舟もつゆに
流るる世の舟もつゆに波とて流るる世の舟もつゆに
流るる世の舟もつゆに波とて流るる世の舟もつゆに

新節を撰んじり

性融 母有基村通寺の足知は健く固福はよくあり

如くくくくくくく

寄月述懐

人いみじう想を母のつとむる世に涙をこぼす

寄雲述懐

よかろく入りつに此家のを仕立てかり

曉述懐

つとめ身のあかしの舟も孤ふるものなほ

寄木述懐

月東のそよ風をささぐりてはるる身もあけ

山家述懐

道き風をささぐりてはるる身もあけ

述懐依人

秋深きはるれど心にかきこもるる心もあけ

老後述懐

老後述懐

述懐流

昔も亦多き流に成るるは神に非

寄流述懐

そこのはら母の心は流に非ざる

寄身述懐

如くも心は母の心なるは流に非

寄情述懐

この心は情を流に推すは流に非

寄世述懐

若くして中流世を母の心なるは流に

うき世の中

如くも流に非ざるは流に非ざる

羈中述懐

そこのはら母の心は流に非ざる

寄神述懐

如くも心は母の心なるは流に非

耻は述懐

如くも心は母の心なるは流に非

懐舊

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

如くも心は母の心なるは流に非

羨懐旧

如くも心は母の心なるは流に非

獨懷舊 加身もたまたまの身も人の身もかたがた
寄夢懐旧 かくはかたもくもく玉の巻も抱いもきよ
及らぬ勅撰のうらなもあられも奉徳をたんとすかく
まゆりも延文元年七月三十三日ありしなりし
しも秋手戒集の事伝下すなりしなりし佛事
の次も人々も作りし懐旧の心

なまの志やその心とすきもあまの志やその心
氏下かたがたも後著り納金入道 生後朝許す

後著り納金入道 生後朝許す
後著り納金入道 生後朝許す
後著り納金入道 生後朝許す
後著り納金入道 生後朝許す

しる傍心 有祝
しる傍心 有祝
しる傍心 有祝
しる傍心 有祝

いふもあまの志やその心とすきもあまの志やその心
氏下かたがたも後著り納金入道 生後朝許す

この道もすしる傍心 有祝
しる傍心 有祝
しる傍心 有祝
しる傍心 有祝

あまの志やその心とすきもあまの志やその心
氏下かたがたも後著り納金入道 生後朝許す
あまの志やその心とすきもあまの志やその心
氏下かたがたも後著り納金入道 生後朝許す

西行上人の双林寺に位納し二月廿八日に
来り佛より奇き事ありしと伝ふる如く

昔持又支の事ありし二月乃春巻候
因制西行上人自筆の山崎集をうへりて法
務寺住持の空林と云ふ事ありし後又抄紙の撰
りてその事ありしと書き傳ふ事ありし是
のねくも事ありし

堀河の事ありし事ありしと書き傳ふ事ありし
稱三位為子のいふ事ありしと書き傳ふ事ありし

長月の事ありし事ありしと書き傳ふ事ありし
用此條の事ありし事ありしと書き傳ふ事ありし

納言千内少将より傳へ

忠懐の事ありし事ありしと書き傳ふ事ありし
ありし事ありしと書き傳ふ事ありし

用一人深服の事ありしと書き傳ふ事ありし
ありし事ありしと書き傳ふ事ありし

ありし事ありしと書き傳ふ事ありし
先師仁巻法師法寺住持より傳へ

あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
中より侍りし

うつりて月日記をておぼしむる母を慕は
ぬなり 歎けりきくは初め月日を記せしむる
昭安の院の御あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
いふあまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
侍りしなり

はるかに侍りてとらふ社のあつたを
母のついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを

惟宗光吉初に母を侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを

八月十五日を侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを

人の世を侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを

あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを
あまのついでに侍りてとらふ社のあつたを

うりく慶とは新日下傳

限あつたてあるは日教より伝ふるあり
日教もとてつる教へんがらあるを伝ふし
雪のち日母乃たりはあり

雪のち日母乃たりはあり
白雲のち母は我よりてつる人のあはれ
才子のちふ書はあつたあり

我れもつる書はあつたあり
乃まわりの七よはあり八月のち

三河守高宗乃たりはあり
乃まわりの七よはあり八月のち

祝部行氏宿禰三十有年ありて行親宿禰佛事い
とて書するはつる持物も報御つるはあり

枕のたてを結ぶ秋の事ありてつる別とあり
等持院つた大はありてつるはあり

お酒の波つたはありてつるはあり
ねめつるはありてつるはあり

ねめつるはありてつるはあり

九月十二日あり侍り故に書物ありていふに
つらき念にふとに侍りていふに

大忠の御書にんごのてらに侍りていふに
縫殿以貞重子息長貞を侍り侍り八月十五
月迄のてらに侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

金に侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

終り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

源光政 侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

春原春任等の所乃てくもくわく因幡のりくもく
加らねりくもくはやくうりてり

二條氏との室乃てかめく度八月十二日佛子
きりて神はなすもくをりてはやく

春東の春きりく別をせのりくわくもくはやく
けりてり行きの春の春きりくもくはやく

春東の春きりく別をせのりくわくもくはやく
けりてり行きの春の春きりくもくはやく

哀傷

異常

夢

神祇

春東の春きりく別をせのりくわくもくはやく
けりてり行きの春の春きりくもくはやく
春東の春きりく別をせのりくわくもくはやく
けりてり行きの春の春きりくもくはやく
春東の春きりく別をせのりくわくもくはやく
けりてり行きの春の春きりくもくはやく

きりりと記

秋神祇

この秋を神のいさよとよきもの昔より及んば
わたりとよむは鶴乃社と云言志一書は海をけり付

社頭杉

有る

あしむとよき宮本有馬山松をきりけの神垣

三嶋社奉祀

いり人の真代あしむあまの宮をきりけの

神本流を流の古流十二月未日大系流もいさよとよ

しつりてとよき神のわたりを流とよきとよき

わたりてとよき神のわたり

教をぬれもの乃越小神本のいさよとよき

り

祝

為流のやまのいさよとよきもの昔より及んば

事流のいさよとよきもの昔より及んば

わたりてとよき神のわたり

迎聖安白飯山三首

黄子世のいさよとよきもの昔より及んば

三宝院信安の泉やつらとよきもの昔より及んば

きりてとよき神のわたり

影子裁の事流のいさよとよきもの昔より及んば

かきとよき神のわたり

寄道祝

人よとよき神のわたり

りてとよき神のわたり

大日
 釋迦
 菩薩
 人界
 聲聞
 緣覺
 色不異空空不異色 般若心經
 不增不減
 真實不虛
 寂勝王經 薩婆王子因緣

此のよにありては... 般若心經... 色不異空空不異色... 不增不減... 真實不虛... 寂勝王經 薩婆王子因緣

諸寶行樹及寶羅網出微妙音譬如百千種樂同時俱作 阿彌陀經
 寶池 阿彌陀經
 普觀 觀經

 此のよにありては... 諸寶行樹及寶羅網出微妙音... 寶池... 普觀...

大正の星乃位... 阿彌陀經... 普觀...

無二惡趣願 無量壽經

ありては彼の道の道入るも亦た清浄を別
著るも玉の泉の音を終り空の地に入ら
ずは和氣の心

法華經 一切の法を修むるも亦た清浄有り
經於子家為法故 勸修品

亦不親近畝獵漁捕 安樂行品

壽量只 諸奥の道の徳を修むるも亦た清浄有り
著るも玉の泉の音を終り空の地に入ら
ずは和氣の心

宝樹多花菓宛生所遊樂 四

巖王品 木の山つなかり春の本花日人めもれををや
さす一とまきさふかき修りや月夜の静寂

植衆徳衣 勸修品

一切衆生悉有佛性 未考

唯識論 非實接故如空花等

安樂集 唯有淨土一門可通入路

魚のひらもあふ今の世は淨土を修むるは

識賜神志觀難成就

往生禮讚

門之見佛後生淨土

身相神通樂

五妙境界樂

當麻の曼荼羅なるは

是の如くは、
如法經書傳、内藏法悲歎辭を以て

松原の風行は、
納言具行のいま、
久み日戸傳

山階の久良之を、
佛舍利を以て

九月十三日、
りてあり

この如くは、

○ 此の御成りあり月の折外を御成りなす
法皇観音院より御成りなすあり乃より御
成りなすありなすありなすあり

○

後宮の院の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
申をなすあり

○ 此の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり

中書雜記

○ 此の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり

○ 此の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり

○ 此の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり

○ 此の御成りなすあり乃より御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり
御成りなすあり御成りなすあり御成りなすあり

恭園白の巾百首の奇をそしむる所しをわたりし
と一とよむるはさきかゝるはむかひあつてし
伝ふるなりし

伊勢の湯乃酒を煮引た湯の湯の湯の湯の湯
世務のゆきまへ千首奇のゆきまへをわたりし
たをゆきまへ

小宰相の隆朝の女小奇をゆきまへをわたりし
をゆきまへし便日女あつたはゆきまへをわたりし
乃ゆきまへゆきまへゆきまへ

氏乃宰相仲將とら位吉社をゆきまへをわたりし
不の物とゆきまへをゆきまへをわたりし奇梅をゆきまへ
私奇ゆきまへの石ゆきまへをゆきまへをわたりしゆきまへ
ゆきまへ

私奇ゆきまへの石ゆきまへの石ゆきまへの石
ゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへ
將軍家草菴集をゆきまへをゆきまへをわたりしゆきまへ

ゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへ
石山傳正草菴集ゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへ
名ゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへゆきまへ

名号年日

いふに、かゝる事、玉拍とせし、
勅撰琴瑟の正法、惟理を、入道、
若浦日元、の、
片、
長、
一、

乃、
子、
く、
乃、
子、
く、

中書雜記五

乃、
き、
乃、

乃、
乃、
乃、

乃、
乃、
乃、

乃、

寛耀僧都子孫をあらうくして侍にまをさうをくち侍

○

比叡山乃中堂にまゝうくくさうくくた

さしの界にまじりて者定おちかたのりてわ
その厚志かたふ越く

ふりわしらあつらひてくそく積禱をまじりて
候りし侍らひらけ旅の仲え海人のかつまらぬ
をさるる

かて候まき浦に沈むるにまじりてかつかう盛衰

高嶺のほろりてあは

辰市 立田山車中まじりて名はあはせりてく
鳴海海 とあしあつらひてくつりては海人のつり
富士山 田車の中まじりて名はあはせりてく
塩竈浦 正平のあつらひてくつりては海人のつり
雷峯塔照 入界に候まじりて名はあはせりてく
比良淺 山陰のほろりてくつりては海人のつり
雅波戸 うまひあつらひてくつりては海人のつり
後波まじりてく

たまにかきそのたが波の上まじりて侍のつり

山陰雅波戸

三条中御之實任有宗是任を川志の湯ありて
一と宗有宗大納言人と稱す難波の月心下上
と此の事なりと云

波のうら月心御引難波の月心御引
宗有宗大納言云

宗有宗大納言云
宗有宗大納言云

波のうら月心御引難波の月心御引
宗有宗大納言云

宗有宗大納言云
宗有宗大納言云

宗有宗大納言云

難波の月心御引難波の月心御引
川流のうら月心御引難波の月心御引
宗有宗大納言云

宗有宗大納言云
宗有宗大納言云

短歌

雜躰

海老宗乃公をうたはれはうも

あき日かた	うき世のやふ	いと世をえ	山のきりけを
てらほり	鶴のくちけ	ふの月	せかたわり
とがせをえ	いとらの春の	と般乃い	さきさき法の
いろくを	八百くはも	あまりえん	まらけの里に
まいてく	まのさうふ	久敷人	うきをさるを
ねあはれ	あらのねあ	まらぬま	まの乃にけ
かきうにく	ほろまのぬ	まらぬま	申くまらふ
ふもわは	佛のいせ	かきあま	あめらのねを
こゆるぬ	古はらうの	まらぬま	まらぬのわを

中巻雑六八

むねわを	海田のうた	さくあは	海きつ溜り
ねあはれ	身のらまゆ	かきあま	まらぬま
まらぬま	あまはらう	まらぬま	あめらのねを
うきさう	うきさう	このまに	ほろくま
いせつは	いせつは	いせつは	まらぬま
あまらぬ	あまらぬ	西へあ	あめらのねを
いせつは	いせつは	ねあはれ	いせつは
つらま	つらま	いせつは	いせつは
あまらぬ	あまらぬ	つらま	つらま
人乃あ	人乃あ	つらま	あまらぬ
まらぬ	まらぬ	いせつは	いせつは

あつたもの	さうさうなる	かきあがり	一二三十一
さなまを	あつたもの	さな加う	海さみ
あつたもの	あつたもの	うらみ	たつたの感
うつりたる	あつたもの	つむぎ	風のたつた
帆をたて	あつたもの	あつたもの	波の手を
つらさを	あつたもの	あつたもの	うらみ
さうなる	あつたもの	あつたもの	あつたもの
あつたもの	あつたもの	あつたもの	あつたもの
あつたもの	あつたもの	あつたもの	あつたもの
あつたもの	あつたもの	あつたもの	あつたもの

志あゆまぬ 運あつたもの 志あつたもの 何なる身
 うれあつたもの 心あつたもの 志あつたもの 平の原を
 まらした 心あつたもの 志あつたもの 心あつたもの
 さつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの
 月あつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの
 志あつたもの
 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの
 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの
 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの
 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの 志あつたもの

うきくは	おのふこの	まのち	ふさくこの
とらまぬ	いふの風を	しものま	うらのま
う地ぢう	いまうのち	秋まのち	うのち
なりあふ	あふのち	まつまの	うのち
まらう	ここのち	まつまの	まのち
おのち	後のち	まつまの	まのち
夕附東	おのち	まつまの	まのち
丹生の川	まつまの	まつまの	まつまの
この酒の	あふのち	まつまの	まつまの
まつまの	まつまの	まつまの	まつまの
千この玉	まつまの	まつまの	まつまの

あいのねの	まがしたく	いふち	梅さく山
夕うま	まのち	まつまの	山田のち
あふのち	まつまの	まつまの	まつまの
まつまの	まつまの	まつまの	まつまの
中なる	まつまの	まつまの	まつまの
うーあ	まつまの	まつまの	まつまの
うらま	まつまの	まつまの	まつまの
いふのち	まつまの	まつまの	まつまの
あふのち	まつまの	まつまの	まつまの
まつまの	まつまの	まつまの	まつまの
まつまの	まつまの	まつまの	まつまの

このまゝ	いそわぬまゝ	とらええ	花より
折角の	舟のまゝ	敷く	さのの
かわり	お茶うち	秋乃	かま
このまゝ	もは	い	れ
のら	まの	今	あ
おち	あ	み	酒
あ	ま	さ	の
ら	ま	か	う
と	い	う	の

みず

お茶のまゝ

物石

まやう あん

ら

くつ

と

三

お

らねしき ばねか

らねほり

らねむく

らねし

らねむく

らねむく

たねまき種うのちねまきのこまのちねまき
くちねまき

種まきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

種まきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

種まきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

種まきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

たねまき種う

村あつちのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

とねむく

昔ねまきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

とねむく

昔ねまきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

とねむく

昔ねまきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

とねむく

昔ねまきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

草名十

昔ねまきのちねまきのちねまきのちねまきのちねまき

松抄句のつらみおもをささく

ははらまを山風通はむはるにふゆをさるるは
陸奥守源氏家にては後中納言十内右衛門督新しむは
と知披梅の後承は月うらみおもをささく
よき侍り

うらみおもをささくをささくをささく
世中志つらみおもをささくをささくをささく
わはらまを山風通はむはるにふゆをさるるは

うらみおもをささくをささくをささく
わはらまを山風通はむはるにふゆをさるるは
うらみおもをささくをささくをささく

旋頭弁

松間紅葉

ももはらまを山風通はむはるにふゆをさるるは
迷懐

うらみおもをささくをささくをささく
六地をささくをささくをささく

廻文弁

うらみおもをささくをささくをささく

誹諧

をささくをささくをささく

加賀の心風たるは海揚武の三葉の枝を折り
やまの心風たるは三月の春の心風なり

我身こそ今かきわききりて春の心風惜み
あつまひくかたは心風なり

あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり

復車の朝の物なりあつまひくかたは心風なり
月をらんくは心風なりあつまひくかたは心風なり
約運をらんくは心風なり

とくは心風なり

秋の車はあつまひくかたは心風なり
夕馬
狩獵
千馬
その心風なり

あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり
あつまひくかたは心風なり

いそはらちの車は方よる昔もきこふかありぬ
一重松をて観音成つたの昔もかた
ゆふの神の世は乃一重松今佛のときき常
念佛尸作とま

き命の佛の世は乃一重松今佛のときき常

連弁

流の氷も甘味也とんといふも昔もきこふかありぬ
ゆふの神の世は乃一重松今佛のときき常
念佛尸作とま

中巻雑世六

まのつとくも昔もきこふかありぬ
ゆふの神の世は乃一重松今佛のときき常
念佛尸作とま

ありともうたはせしはなす
 東山は白竹のうら花山院なまは花のほおろし
 一しと花のまはせしはなす
 熟葉の陣をあらあまは
 ともかたもも秋をうけき
 花を月ともいふはあまは
 月と花のまはせしはなす
 山の峰はまはせしはなす

月やうかをれ末の秋のあ
 けまに山の峰のうらな
 雲山のまはせしはなす
 風は雲外を乃花とら
 山あまあまのうらな
 山あまあまのうらな
 山あまあまのうらな
 山あまあまのうらな

小倉雜世七

こ中れも花ははなす
 いくつとわのうらな
 月のまはせしはなす
 花を月ともいふはあまは
 月と花のまはせしはなす
 山の峰はまはせしはなす

中室入道と改たはあまは
 中室入道と改たはあまは
 中室入道と改たはあまは
 中室入道と改たはあまは

竹の心子と大納言の心子と車ついでに
 戸を打たぬとぬれよとささくとの竹の心子と
 玉の心子とぬれよとぬれよとささくとの竹の心子と
 竹の心子と
 一長門の心子とささくとの竹の心子と
 古来の心子と大納言の心子と
 心子とささくとの竹の心子と
 あまの心子とささくとの竹の心子と
 菅人の心子とぬれよとぬれよとささくとの竹の心子と
 新の心子の心子とささくとの竹の心子と
 心子の心子とささくとの竹の心子と

山崎雅世八

竹の心子と大納言の心子と車ついでに
 戸を打たぬとぬれよとささくとの竹の心子と
 玉の心子とぬれよとぬれよとささくとの竹の心子と
 竹の心子と
 一長門の心子とささくとの竹の心子と
 古来の心子と大納言の心子と
 心子とささくとの竹の心子と
 あまの心子とささくとの竹の心子と
 菅人の心子とぬれよとぬれよとささくとの竹の心子と
 新の心子の心子とささくとの竹の心子と
 心子の心子とささくとの竹の心子と

ありけり世もなほくもなき
 梅の五枝の毛もまじりて
 田舎のやの山ものうき
 流らじつらふ海まつり
 心さ玉章海にまじりて
 中務中将為景朝臣父三位
 乃料然れは侍りて
 むらきなきもあつと
 いふまふあつと魚どの
 つらき海らふとてををを

あきこゝたて物点の日敷て
 春降の雪の舟乃重なりん
 舟流る海もあつと
 山さ玉もたぢを降る
 ありけり世もなほくもなき
 中務中将為景朝臣父三位
 乃料然れは侍りて
 車をいれてつらき
 川流の舟もあつと
 あきこゝたて物点の日敷

山養雅四十一

我枯の折分小船さき
 何の障さつとをわたり
 鶴乃翅のまじり白き
 けのよむり花かたわら
 けり乃月花をさつと
 山流の衣の毛もまじり
 右のきりて手もまじり
 くら乃けりて手もまじり
 ありけり世もなほくもなき

海乃小舟の舟乃重なりん
 雨の雪の舟乃重なりん
 舟のまじりてつらき
 さよの舟はつと海もあつと
 ありけり世もなほくもなき
 あきこゝたて物点の日敷て
 春降の雪の舟乃重なりん
 舟流る海もあつと
 山さ玉もたぢを降る
 ありけり世もなほくもなき

第にありてをてびりやいんん 第かめのみさるの松のうを
あふはつる後さふなりー 第さしたててを人を恨まや
つくとさき程の身ろ 玉穂の糸代もをいふ海に
何路のう世新しけりもさ同様の借 づまのうを
つとをさきをまけとすけり 山城のさるまきとさ川
山と伝まきおの乃掃の樂せ 蘇てあつた後乃掃とさ

詠百首和歌

頌阿

春十五首

遥峯帯晚霞

とらやうの峯乃西紅はつた山もさる蘇が

殘雪更粘枝

山もさる雪の更なれはつた山もさる蘇が

春浅霜凍夜

山もさる霜の凍る夜はつた山もさる蘇が

梅殘數點雪

梅の残る雪の數はつた山もさる蘇が

清月上梅花

梅の残る雪の數はつた山もさる蘇が

柳間黄鳥路

さくらにうぐいすさくらをさくらをさくらとてかきよめ柳の枝

春江浪拍空

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

春深花始開

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

花開紅樹亂

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

花散風雨多

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

世井いかにをるる花をさくら山風吹てはるる

坐久落花多

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

花落樹猶香

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

顔馨樹古藤

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

歳時春猶少

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

春盡鳥聲中

かきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめかきよめ

夏十首

深谷夏聞鶯

よきとほろのまはつ岩陰のきつるまのまはつ

緑樹連村暗

まのまを海をたふぼくまのまのまのま

山雲夏忽繁

山降ゆる加事の自すの松をのぼるまのま

松風五月寒

まつまのまの松をのぼるまのまのま

風樹鳴蟬咽

まのまの松をのぼるまのまのま

秋声帯雨荷

山雲集四十二

扇風生竹

風をた池の蓮葉お花をまのまのま

泉声到池盡

まのまの松をのぼるまのまのま

雨餘生晚涼

まのまの松をのぼるまのまのま

螢入定僧袖

まのまの松をのぼるまのまのま

秋十五首

露気早知秋

まのまの松をのぼるまのまのま

一雨洗殘暑

雨のふるあまのなはをきつるあまのなはをきつる秋のきつる

野色混秋光

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

天高雁横空

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

終夜看蚕色

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

稻花千頃浪

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

江声入秋寺

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

月色一窓虚

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

江清月近人

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

雞声第夜月

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

山曉月初上

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

月向白波沉

あまのなはのいろはあまのなはのいろはあまのなはのいろは

遠山青入霧

遠山青入霧の霧はの上は半の月乃霜

風便教砧聲

枕のこぼれは危の聲をききしをぬる川の

新霜染楓樹

いづれもいづれも秋風のまねのまねは

冬十首

落葉無行路

おきかよとむらと田山おきかよとむらと

木落見他山

出巻染葉五

人跡板橋霜

昔より伊約乃山の紅葉を楳の冬よりみる

破林霜後月

霜は林の板より流るる日影のまはり

山寒水欲氷

枝は枯れしを葉の教をてお東の月乃寒の

一鳥過寒水

おわしとやとわしとやと川流をききし

清晨雪擁門

山川のよきを雪はふりけは仍考の独居る

まはりのむらとの山をききしをききし

晴雪落長松

あき日は暮の松乃若くは松より雪の光

獨釣寒江雪

降つち雪ふれぬ其の江乃氷に於て釣舟

流年川晴度

きりぬ月日と角て流集別流も舟は

忠十首

心知人不知

何と只とわらふことぞもたふふあめは世の法

唯有淚痕多

社をたふすは川流川何を今いふことぞ

中絶采雲

三年不見書

お松よの玉札をよめりては力のわたり

淚盡腸欲斷

限あまを涙も今いふあめは

入愛到如今

うねのそねまき舟か望み打もつとぬ

花開更憶君

あめはあめはの涙をよめりては

空国殘燭夜

あめはあめはの涙をよめりては

恨別鳥驚心

別後會難期

別後會難期
別後會難期
別後會難期

何處更相逢

何處更相逢
何處更相逢
何處更相逢

旅十首

山路雲間沒

山路雲間沒
山路雲間沒
山路雲間沒

江邊問船子

江邊問船子
江邊問船子
江邊問船子

舟行夜已深

舟行夜已深

棹入黃芦浦

棹入黃芦浦
棹入黃芦浦
棹入黃芦浦

蒼苔滿山徑

蒼苔滿山徑
蒼苔滿山徑
蒼苔滿山徑

御信寄胡雁

御信寄胡雁
御信寄胡雁
御信寄胡雁

人行秋花中

人行秋花中
人行秋花中
人行秋花中

路明殘月在

路明殘月在
路明殘月在
路明殘月在

路明殘月在
路明殘月在
路明殘月在

難色入冥寒

客愁双鬢覺

閑居十首

幽居有餘樂

盡日掩柴扉

秋月離喧見

なほぬまの川若草の葉はたふらふにやうき

茶枕拵は車窓のなほて遠のくにありて

公とありわらふまことのまぬぬにほらわ

とあは若くもさるるのなほはまはら

まのそこのまの若くして月影のなほは

あはれ

とこり

あはれ

甲庵茶四十八

溪居絶是非

山中無曆日

鳥啼人不見

猿生隨白鷗

閑門留野鹿

身在能無事

あはれき山乃わらふと世非れまも濁りの

を秋の枝の色又まはれ月影はあはれ

はなれぬち山乃わらふのなほて若の居は

そのはらふあはれまはれまはれまはれ

閑門をまもるまをまをまをまをまを

身在能無事

竹徑通幽處

今つて竹徑をたづねて幽處の公のまにまをたづね

その竹は世のわが竹の葉は松の村を

雜二十首

半山無夕陽

あまの夕陽が山を照らすの山は夕陽の村を

鐘聲雲外殘

あまの鐘の音は雲の上の山を照らすの山を

水窮天盡頭

あまの水は尽き天は尽き頭は尽き

流水浸雲根

山陰集四十九

山光落釣舟

山光は釣舟の舟に落ちる舟の舟

船子浪高低

船子の浪は高低の浪をたづね

風林無鳥宿

風林は鳥の宿をたづね

天色無情談

天色は無情の談をたづね

人間多苦人

人間は苦人の人多し

あまの人間は苦人の人多し

世路山河煥

清溪孤照影

松多寺不見

遠嶂收殘雨

落日沉沙頭

清風隔世塵

世路山河煥
松川やおろそ後
松多寺不見
遠嶂收殘雨
落日沉沙頭
清風隔世塵

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

くまき松もね
くまき松もね
くまき松もね
くまき松もね
くまき松もね
くまき松もね

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

中巻五

衰鬢臨朝鏡

瀑近夜疑雨

鷺立斜陽裏

中田級々高

僧談悟色空

おろそ後
おろそ後
おろそ後
おろそ後
おろそ後
おろそ後

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲
あはれく周加汲

詠百首和歌

春二十首

頓阿

紫中立春 山霞 春雪 朝鶯 淡若菜 餘寒 梅薰風 行路柳 春雨

紫中立春 神詠山の春の立ちゆく月の内外を春の影
山霞 雲の影を烟の末乃らうとまはれぬ深き山霞
春雪 春の雪のさうとや春の山田の春の影の村
朝鶯 春の鳥の春の影の春の影の春の影の春の影
淡若菜 淡若菜の影の春の影の春の影の春の影
餘寒 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
梅薰風 梅の影の春の影の春の影の春の影の春の影
行路柳 柳の影の春の影の春の影の春の影の春の影
春雨 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影

中巻 春二十首

若草 春月 帰馬 初花 見花 蹴花 惜花 落花 籬歎冬 松上藤 暮春

若草 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
春月 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
帰馬 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
初花 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
見花 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
蹴花 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
惜花 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
落花 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
籬歎冬 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
松上藤 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影
暮春 春の影の春の影の春の影の春の影の春の影

夏十首

首夏
 待郭公
 圃郭公
 早苗
 溪五月雨
 夏草
 夏月
 水邊螢
 夕立
 六月後

九折の春の一草の如きをてなつて
 さわらばさうり多きもほほほ
 赤く又赤くはなして
 神や公のいづれ
 山の紫はさよふ山乃谷水と波の
 立ゆり花やまて
 赤心はまのり
 夕立ふふ下あ
 吹をう海風流
 海もよ木接
 山の紫はさよふ山乃谷水と波の
 立ゆり花やまて
 赤心はまのり
 夕立ふふ下あ
 吹をう海風流
 海もよ木接

山鹿雑草二

秋二十首

早秋
 乞巧奠
 疾風
 萩露
 殊夕
 初鴈
 秋田
 夜鹿
 曉虫
 山月

赤もはまのり
 夕立ふふ下あ
 吹をう海風流
 海もよ木接
 山の紫はさよふ山乃谷水と波の
 立ゆり花やまて
 赤心はまのり
 夕立ふふ下あ
 吹をう海風流
 海もよ木接

湖月
野月
夜月
庭月
關霧
雨掃衣
重陽宴
杜紅葉
川紅葉
九月盡

久望のまじりまき場のはらばら水のたぎらるる
世乃葉のまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる
ありかたのまじりまき場のけんはらばら水のたぎらるる

冬十首

山本集卷十三

初冬晴雨
寒草
落葉
冬月
夜雪
積雪
池氷
豊明節會
浮千鳥
歳暮

冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに
冬のついでに

忘二十首

遠浦帰帆 およしの有らざるの波のよらうかたはるかに
 洞庭秋月 とし底を月も庵もよそなを月をそなぬ秋の山落
 平沙落雁 ひまよひの波をよそな海をよそなむらりのあり
 江天暮雪 いそ山の暮れをよそな夕の波をよそなむらりを
 蒲湘夜雨 けしひの波のありて暮れをよそなむらりを
 山市晴嵐 けしひの波のありて暮れをよそなむらりを
 漁村夕照 けしひの波のありて暮れをよそなむらりを
 遠寺晚鐘 けしひの波のありて暮れをよそなむらりを

新後拾遺雑下

頻阿

とよとよの波のよらうかたはるかに

出巻第六

新續古今春上

長 けしひの波のよらうかたはるかに
 秋 けしひの波のよらうかたはるかに
 恋二 けしひの波のよらうかたはるかに
 三 けしひの波のよらうかたはるかに
 五 けしひの波のよらうかたはるかに
 離別 けしひの波のよらうかたはるかに
 寄旅 けしひの波のよらうかたはるかに

近傍殿傍書

竊視此集之緝編可謂和奇之規範頭意於
萬象之中岳風神於千載之後誠是此道
之遺券也豈不斯文在茲乎不^足嗟嘆斯吟性情
而已

と一へぬらひけり人みりきと我

あつたひ乃教つとる

右草菴集與也

出菴集上七

或曰頌阿草菴集今世學和歌者最可為
龜鑑者也余於是留心於此集者蓋有年矣
且又欲便披討立題分類聚類歌於其題之下
東為一弓以為吾家之弊帚比日依剎剎氏
之求壽梓嗚呼雖有似畫蛇添足之拙庶亦
初心學者之行遠升高之一助云尔

元祿八年菴集乙辰九月日

二口又云子



草菴和歌集類類拾遺

板行出集

元禄八乙亥年九月原板
寛延四辛未年孟春重刻
安永四乙未歲孟春再重刻

京師書肆

浪華書肆

同

武村新之助

加藤六藏

岩崎徳九郎

葛城長三郎

天明七年二月

久野廣之助
觀

尾張

市川八郎

五

